九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

エスニック・セクト : メキシコのメノナイトを中心に

坂井, 信生

https://doi.org/10.15017/2328611

出版情報：哲學年報. 40, pp.111-132, 1981-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

エスニック・セクト

——メキシコのメノナイトを中心に——

坂　井　信　生

は　じ　め　に

宗教的セクト集団のなかには，それがもつオーソドキシイといちじるしく異なる信仰と実践の体系のゆえに，既成の宗教的組織が強固な社会においてひろく受容されることなく，むしろ，弾圧や迫害の避難所を求めて数度の移住を余儀なくされる，という体験を有するものが少なくない．さらに，これらのセクト集団は移住のプロセスを通して，独自の文化を有する孤立した排他的社会集団として存続する傾向をすら示している．この傾向は，とりわけ，16世紀の再洗礼派にその源流を見出すメノナイト系諸集団にみることができる．すでに明らかにしたアメリカ合衆国に居住するアーミシュ派[(1)]のごときはその典型的事例といってもよいであろう．われわれは，このようなすがたをもつセクト集団，すなわち，特異な信仰と実践の体系と結合して，(1)外部社会と社会文化的に分離した独自の社会構造を有する共同体を構築し，(2)エスニックな特性の濃密な文化的パターンを強力に展開し，さらには，(3)成員補充をその成員の子女のみに排他的に限定している，いわばエスニックな社会文化的集団と同一視されうるセクト集団に対して，エスニック・セクト (ethnic sect) という名称をあたえ呼ぶことにしたい．

この小論は，かかる意味でのエスニック・セクトの一事例として，メキシコのメノナイト集団を取上げようとするものである．筆者は昨年（1979年），「南部メキシコにおけるカトリック文化の研究」と題する調査に参加して2ケ月メ

キシコに滞在，その折に幸運にもかねてより関心を抱いていたメノナイトの居住するコロニア・メノニータス (Colonia Menonitas) を訪ねる機会をえた．この集団は Die Altkolonier Reinländer Mennoniten Gemeinde (以下「アルトコロニー・メノナイト」と記す) というドイツ語による正式名称を有している事実からも推察できるように，まさに先にのべた諸条件を備えたエスニック・セクトである．諸般の事情で，このメノナイト調査期間は僅かしか取れなかったために充分な成果をうるには至らず，再度の訪問が実現したあかつきに詳細な調査報告を公にしたいと願っている．したがって，本稿では今回の調査で入手することのできた資料を中心に，アーミシュその他のエスニック・セクトにカテゴライズされうるセクト集団との比較において，エスニック・セクトに関する試論的な考察を試みていきたい．

I

はじめに，ラテン・アメリカ諸国におけるメノナイト系宗教集団の動向を一瞥しておきたい．

ラテン・アメリカ諸国は，1922年，アルトコロニー・メノナイトがカナダよりメキシコに移住して以来，メノナイト集団の新たなる移住地として脚光をあび，急速な成長ぶりを示している．かれらがすぐれた農民であるとの評価をえて，これらの諸国の未開拓地への入植がむしろ歓迎されているからである．およそ半世紀を経過した1971年には，アルトコロニー・メノナイトをはじめアーミシュなどのドイツ系を主体に，一般にエスニック・メノナイトと呼ばれるグループが，メキシコ，ブリティシュ・ホンジュラス，ボリビア，パラグアイ，ブラジル，ウルグアイに約30,000の教会員，家族をふくめると60,000をこえる人口を擁している．他方，エスニックな特性を有さないメノナイト集団も，合衆国の主要3メノナイト教会 (Mennonite Church, Mennonite Brethren Church, General Conference Mennonite Church) による伝道活動の結実として，ペルー，アルゼンチン，ブラジルを中心に18のラテン・アメリカ諸国に，約12,000の信者を獲得している．

かかるラテン・アメリカ諸国におけるメノナイト集団のうち，ドイツ系のそれの85%以上が，メキシコ，パラグアイ，ホリビアの3国に居住しており，とりわけメキシコにはその半数以上が居住しているという．1971年の統計によれば，これらドイツ系エスニック・メノナイトは全体で約60,000を数えているが，メキシコに32,000（54%），パラグアイ13,000（22%），ホリビア5,500（9%）である．[2]

今日，メキシコには3種のメノナイト集団が存在している．[3] その一つは Iglesia Evangelica Menonita de la Mesa Central de Mexico であり，合衆国ペンシルバニア州の Franconia Mennonite Conference が，かってキューバに伝道していたが革命で継続不能になったために，1958年以降，メキシコ市およびオアハカ（Oaxaca）のインディオ，トルク族（the Torgues）を主たる対象として伝道活動を行っているものである．カトリックの強固なこの国での伝道はいたって困難が多く，100名を若干こえた信者を獲得しているにすぎないという．

第2のメキシコにおけるメノナイト集団は，Mennoniten Gemeinde zu Mexico である．この集団も同じく合衆国の General Conference Mennonite Church によって，1957年よりチワワ州（Chihuahua）のクワテモック（Cuauhtemoc）で伝道活動を行っている約300名程の信者を有する集団である．この集団はチワワに居住するアルトコロニー・メノナイトから離脱した者たちを主たる対象に活動している．

第3のメノナイト集団は，前2者と異なりエスニックな特性を有するそれであり，第2のメノナイト集団が伝道対象としかつ本稿で取上げんとするアルトコロニー・メノナイト，すなわち，Die Altkolonier Reinländer Mennoniten Gemeinde である．1922年カナダよりメキシコに移住して以来，チワワ，デュランゴ（Durango），サカテカス（Zacatecas）などにコロニアを設立し，教会員約26,000，家族をふくめると約50,000が集団的に居住している．筆者が訪れたのはサカテカス州ミゲラウサ（Miguel Auza）に位置するコロニア・メノニータスである．

II

アルトコロニー・メノナイトは，同じくエスニック・メノナイトのカデゴリーに入れうるアーミシュやハッタライトと共に，16世紀の宗教改革運動の一翼である福音的再洗礼派（Evangelischer Wiedertäufer）にその源流を有している．

アーミシュ（Amish）はスイスのベルン地方を中心に展開したスイス兄弟団（Schweitzer Brüder）から，1693年以降，「忌避」の適用問題をめぐり分裂したセクト集団であり，その名称は指導者ヤコープ・アンマン（Jakob Ammann）に由来する．かれらは非公認の宗教信仰のゆえにベルンから放逐され，アルザス，ファルツとラインを下り，1700年代の前半に北アメリカ・ペンシルバニアの東南部に移住，外部社会から孤立した共同体の構築に成功している．ライン上流地域から携え渡ったエスニックな文化的パターンを今日に至るまで保持し，独自の教育制度を確立するなど特異なすがたで存続している．現在，アメリカ合衆国およびカナダに約65,000のアーミシュが居住している．

ハッタライト（Hutterites）[(4)]は南ドイツおよびチロルの再洗礼派の一群が母胎であり，迫害を避けてモラビアに移住するが，その途上，貧困に難渋したかれらはそれぞれの所有物を出し合い，集団全体の生存を計った．このことがその後の財の共有制実践の端緒となる．1528年のことである．1533年チロルの牧師ヤコープ・フッター（Jakob Hutter）の加入により明確な集団組織を形成するようになるが，ハッタライトという名称はかれの名にちなんでいる．18世紀初頭までかれらはモラビアで繁栄をみるが，迫害の激化にともないさらに東方に逃れ，やがてウクライナに落着く．しかし，この地もかれらには安住の地ではなく，1874年他のメノナイト集団と共に北米に移住するのである．今日では，合衆国およびカナダに農業を中心とする約200のコロニーを設立，コミュナル・ライフを営んでいる．

これら二つのセクト集団と共に，アルトコロニー・メノナイトの基本的な宗教信仰は相互に類似しており，とりわけ，再洗礼派に特徴的な「この世からの分離」(separation from the world) および「つり合わないくびきを共にしない」

(non-conformity) という宗教原理を強固に信奉し，外部社会からの孤立化にいちじるしい集団的努力を試みている．また，これらの集団では今日，若干方言化しているとはいえ，基本的にはドイツ語が宗教用語，日常用語として用いられている．他方，それぞれの発生地，歴史的推移における異なりは，これらの集団のとくに社会構造に大きな差異をも展開せしめていることも事実である．就中，それはかれらの共同体構造，とくに所有形態に明らかである．すなわち，ハッタライトが財の完全な共有制を実践しているのに対し，アーミシュは完全な私有制である．アルトコロニー・メノナイトは両者の中間的様態を示しており，セミコミュナル (semi-communal) ということができよう．

さきに要約した二つのエスニック・セクトと比較して，アルトコロニー・メノナイトはいかなる歴史的推移を経過してメキシコに到来しているのであろうか．また，かれらの歴史的推移はエスニック・セクトの形成過程に関する貴重なモデルを提供するとも理解することができる．われわれは今少し詳細にその展開のプロセスを観察することにしたい．

すでに指摘したように，アルトコロニー・メノナイトは16世紀再洗礼派運動の主要な流れの一つであるメノナイトの系譜をもつセクト集団である．

再洗礼派に対するカトリック教会およびプロテスタント教会による絶えざる迫害は，再洗礼派運動が共通する信仰と実践の基盤の上に一つの明確に統合された教会組織を形成することを妨げた．しかしながら，1530年から66年にかけて，オランダの元カトリック司祭メノー・シモンズ (Menno Simons) が，オランダを中心にバルト海沿岸の北ドイツ諸都市に点在していた再洗礼派居住地を足がかりに，次第にこの一帯の再洗礼派の必ずしも明確でなかった信仰と実践を一つの体系に統合することに成功し，教会組織を発展させたのである．この組織にはさらに各地から流入して来た多教の再洗礼派が吸収され，やがて指導者メノーの名にちなみ，メノナイト (Mennonites, Mennoniten) と称されるようになる．かくして，われわれはこの初期メノナイト集団が異質的なエスニック要素を多分にふくんで成立しており，純粋に宗教信仰と実践に志向性を有した一群である事実をみるのである．この点で発生当初から同一のエスニック集

団から成り立っているアーミシュおよびハッタライトと大きく異なっているということができよう.

ほどなく，宗教改革に対抗する動きがオランダ，北ドイツでも活動を開始するに及び，他地方からの流入者をふくむこれらメノナイト集団は，東部プロシアからポーランドに新たなる避難所を求めた．ことに，スペイン総督アルバ公(Ferdinand Alvarez de Toledo) 統治下のいわゆる恐怖時代 (1567年～73年) は，オランダからダンチッヒ (Danzig, 現在の Gdańsk) あるいはビスラ (Vistula) 周辺へのメノナイトの逃避の頂点となっている[5]．この地の参事会はかれらの勤勉と技術，とりわけ，ビスラ川川口附近のデルタ地帯の干拓農業に発揮したすぐれた技能を高く評価したにもかかわらず，かれらに対しては市民権をみとめようとしなかったし，一般市民や聖職者による敵意と抑圧はとどまるところを知らなかったという[6]．

ダンチッヒ移住当初，この地のメノナイト共同体と母国オランダとの関係は，かなり密接であったと思われる．しかるに，オランダとの交渉が衰退してくるにつれて，ドイツ語の宗教文献，とりわけルター訳聖書や讃美歌集が入ってくるようになった．18世紀後半，かれらは南ロシアに移住を試みるのであるが，この頃になると，ドイツ語が完全に教会の公式用語となっており，他方，日常用語はそれ自体低地ドイツ語 (Plattdeutsch) の一方言ともいえる東部プロシヤ語に変化している[7]．しかしながら，この集団が明確に一つのエスニック・セクトに発展するには，かれらの南ロシア移住をまたなければならない．この地は依然として強いドイツ文化圏内にあり，言語その他の面で次第にかれらがドイツ化してきたとすれば，そのメノナイトという宗教体系に関与している限りでの異なりはあるものの，かれらに東部プロシアの他のドイツ系諸集団とことさらに異質な文化的パターンを見出せないからである．

このような動きに加えて，とくに，1772年の第1回ポーランド分割の結果プロシアに編入された地域における経済活動への圧迫，兵役免除をふくむ宗教的自由への侵害は，メノナイト集団の凝集性を増加させ，この社会的環境からの後退を求める願望を高めるのである．まさにこのような時期に，ロシア女帝エ

カテリーナ2世の特使トラッペ (Georg von Trappe) を通じて，ダンチッヒ・メノナイトに南ロシア招請の報がもたらされた．1787年，2名の長老がロシアに派遣され，提供さるべき土地を検分し，必要な条件への同意を求めた．かれらはロシア当局から宗教信仰の自由，兵役免除，土地の配分，租税免除の年数，自治制など宗教的，経済的権利と義務に関する満足すべき回答をえて帰還した．翌1788年より南ロシア，ウクライナのコルティツァ(Chortitza, Khortitsa)への移住が開始され，228家族がダンチッヒを後にしたのである．(8)

コルティツァはエカテリノスラフ (Ekaterinoslav, 現在の Dnepropetrovsk) とアレクサンドロフスク (Alexandrovsk, 現在の Zaporozhe) の中間，ドニエプル川左岸に位置している．この地はロシアにおける最初のメノナイト入植地であるため，のちに設立された入植地に対して「古い入植地」(Altkolonie) の名称があたえられている．(9) この名称はやがて本稿の主人公であるアルトコロニー・メノナイトの正式名称の一部にも用いられることになるのである．

コルティツァのメノナイト移住者はロシア正教徒はもとより，カトリック，ルター派，改革派などのドイツ系移民とも効果的に分離された一つの集団として遇され，いくつかの特権が協定にしたがってあたえられた．換言すれば，メノナイト入植者はその領域と目的を宗教生活のみならず，社会生活上の世俗的要素にまで拡大した地域共同体として組織することが期待されたのである．このことはかれらが独自のエスニックな特性を充分に展開することを可能にする条件を備えたということでもある．

入植当初，コルティツァのコロニーは89,000エーカーが割当てられ，15の村 (Dorf) に分たれていたが，人口の増加にともない，最終的には400,000エーカーの広さに達している．さらにプロシヤからの移住者が続くため，ロシア政府はモロチュナ (Molotschna) あるいはベルクタール (Bergthal) その他にもメノナイト・コロニーの設立をみとめ，全体で約6,000名からなる1,000家族以上が居住したのである．(10) ともあれ，その後1世紀近く，かれらはウクライナで比較的平和裡に，ロシア政府の干渉もほとんど受けることなく，言語，衣服，教育，相互扶助，あるいは村のパターンなどといった世俗的要素をふくむ，か

れら特有のエスニックな宗教＝社会生活を営むことができたのである．そしてまた，この期間にメノナイトという宗教集団がエスニックな特性のきわめて濃厚な社会文化的集団と同一視されうる形態をとるにいたるのである．この時期に確立された諸制度が，今日のメキシコのアルトコロニー・メノナイトにみられるそれらの原型をなしていると考えられるのである．

ところが，1870年突如としてロシア政府は全教育体系を文部当局の管轄下におくことを要求し，メノナイトの学校教育にロシア語を導入し，カリキュラム上の要求を課した．さらに，かれらの自治にも同化の方向へむかわせる政府の干渉の手が及び，かれらの分離と孤立は大きな危機にさらされることとなった．かくして，かれらは再度移住先を求めて調査団を北アメリカに派遣，カナダ政府より宗教信仰と実践の自由，兵役免除，教育，メノナイトによる一定地域の占有と自治管理のごとき，かれらの信念と伝統にしたがった宗教＝社会生活の基礎となるべき項目に保証を得たのである．(11)

1874年から5年にかけて，ウクライナ・メノナイト集団のおよそ3分の1と推定される約5,000名がカナダのマニトバ (Manitoba) に移住した．モルチュナ，ベルクタールの群はレッド川の東岸 (East Reserve) に，コルティツアからの群は西岸 (West Reserve) にそれぞれ入植したのである．(12) このマニトバが，ほどなくこれらメノナイト集団の分裂，そしてアルトコロニー・メノナイト出現の舞台となるのである．

マニトバに入植したメノナイト集団は，必ずしも統一された集団組織を有してはいなかった．レッド川西岸に入植の群は東岸の群と比較して，経済的に貧しく，教育程度も低く，より保守的であったという．(13) この宗教＝文化的保守主義がやがてマニトバにおける分裂を招来し，今日のメキシコその他に展開するにいたるアルトコロニー・メノナイトの基本的精神と特質を提供するのである．たとえば，讃美歌は西岸の方が旧来の唱い方 (die alte weise) を，東岸の方が新しい唱い方 (die neue weise) を採っていた．また，マニトバ州政府が州をそれぞれの公的代表者を有する自治体 (municipality) に分割した際，前者はそれがかれらのもつ村落構造にとり危険なものと反対したのに対し，後者はこれ

を承認している．とくに重大な異なりは教育問題であった．かれら自体の教育制度を自らの手で維持することが，カナダ移住に当ってのかれらの願望であり，またマニトバ州政府もこれを承認したところである．したがって，前者はかれら自身の教育プログラムを推進し，学校でドイツ語を，主たる教科書として聖書を用いたが，後者はその伝統の改善を試み，むしろ州政府に援助をすら求めたのである．

このような両者の異なり，とりわけ教育問題に関する論争は両者の他の生活面にまで拡大され，妥協の余地を見出せないほどになった．1880年，西岸ウェスト・リザーブの指導者ウイーベ (Johann Wiebe) が男子教会員による会議 (Bruderschaft) を招集し，旧来の伝統と信念に恭順を示すすべての者はそれを明確にし，同調しない者は東岸イースト・リザーブの教会に属すべきことを求めた．この結果，ウイーベに従った群がアルトコロニー・メノナイトであり，正式名称として Die Altkolonier Reinländer Mennoniten Gemeinde を採用した．"Reinland" なる名称は，この保守派の村 (Dorf) のほとんどがウェスト・リザーブの Reinland という自治体に存したことによっている．(14)

メノナイト集団がカナダに移住するに先立ち，かれらがロシアで享受していた特権，すなわちかれらの伝統的なウェイ・オブ・ライフをカナダでも完全に実践しうることを政府は保証していた．もちろん，この保証には教育に関する項目もふくまれていたが，政府はかれらの学校を州の管轄下に置く動きを示し，マニトバ州は1890年に「マニトバ公立学校条令」(Manitoba Public School Act) を通過させ，州内のすべての小学校での同一基準のカリキュラムと同一言語（英語）による教育を要求した．この条令は1897年に二重言語による教育を許容し，住民多数の要求があれば，学校委員会が宗教教師を雇用しうるとの改訂を行っている．

この学校問題は一時沈静化したが，第一次大戦中に再燃し，1916年，英語を唯一の教育用語とすること，すべての児童は文部当局の要請に合致する私立小学校か，さもなければ公立小学校に在籍すべきことを定めた「学校在籍条令」(School Attendance Act) の発布は，アルトコロニー・メノナイトの間に対処

すべき行動についての深刻な論議を惹き起した[15]．さらに，戦時中という状況はかれらに英領民の義務として戦争遂行への協力を強要することとなり[16]，ここにいたってかれらは今一度移住の可能性を真剣に考慮しはじめるのである．

もちろん，それまでにも移住が考えられていない訳ではない．1895年から1905年にかけて，およそ1,000名のアルトコロニー・メノナイトがサスカッチェワン州（Saskatchewan）のオスラー＝ヘーグ地方（Osler-Hague）に，またスィフト・カレント（Swift Current）に移っているからである．大規模な移住先が討議され，合衆国における可能な移住先の探索が不調に終ったのち，6名の代表者がメキシコに派遣された．1921年のことである．かれらはメキシコ市で大統領オブレゴン（Alvaro Obregon）と接見，かれらの要請を認可する趣旨の特許状（Privilegium）を携えて帰国した．この特許状は，兵役の免除，宣誓の免除，宗教信仰と実践の自由，学校教育の自由，財産管理に対する政府の不干渉といった5項目をふくんでいる[17]．次いで，土地購入のための調査団を派遣，マニトバ・グループはチワワに230,000エーカー，サスカッチェワン・グループはデュランゴに35,000エーカーの土地を購入し，翌1922年から26年にかけて，前グループは3,340名が，後グループは1,000名足らずがメキシコに移ったのである[18]．これらの入植者が，今日メキシコに居住するアルトコロニー・メノナイトであると同時に，メキシコ在住のエスニック・メノナイトはほとんどがこのグループに属している．

以上概述してきたように，アルトコロニー・メノナイト集団そのものの歴史はたしかに前世紀末のマニトバにはじまるのであるが，オランダ，北ドイツからダンチッヒ周辺を経由して，南ロシアに入植していた期間に，これらのメノナイト集団は明確にエスニック・セクトとしての特性をもつようになっている，ということができよう．そしてさらに，この特性を一層強固なものとして展開しているのが，メキシコにおけるアルトコロニー・メノナイトのすがたなのである．次に，われわれはかれらの特徴的な生活実態を観察することにしよう．

Ⅲ

サカテカス州ミゲラウサ (Miguel Auza) は筆者が主に滞在していたグアダラハーラ (Guadalajara) から北方に約 600km のところにあり，メキシコ中央高原のほぼ西端の海抜 2,000m の高原である．アルトコロニー・メノナイトの入植地はスペイン語で「コロニア・メノニータス」(Colonia Menonitas) と呼ばれており，ミゲラウサの村の中心部カベセーラ (cabecera) から南方に直線で 25km である．しかし，そこに至るにはコの字型に迂回した道路しかないために 40km もあり，一般メキシコ人社会から空間的にもかなり孤立したところに位置している．

アルトコロニー・メノナイトが占有しているコロニアは17,000ヘクタールの広さであり，見事に耕作された農地が続いている．この地はサスカッチェワンから入植したデュランゴのコロニアにおいて，人口増加のため[19]に続出する土地の無所有者を解消すべく，1964年にラ・オンダ大農園 (Hacienda La Honda) を購入して分岐したものである．この購入交渉は10数年前よりはじめられていたが，地味が余り良質でないとの理由でしばし中断されていた．しかし，デュランゴで 200 をこえる土地無所有家族が生じたために，他に適当な土地の入手が不可能であった事情もあり，再交渉の結果，購入の決定をみたのである．当初の計画は29,000ヘクタールからなる大農園全体の購入であったが，かれらに対する周辺のメキシコ人農民の反対のゆえに12,000ヘクタールが除かれたという[20]．

北緯23度と北回帰線近くに位置するとはいえ，海抜 2,000m の高原にあるためか，筆者が訪れたのが 8 月初旬であったにもかかわらず，いたって温暖であり，夜などはひんやりした風が心地よく感じられた．6 月から 9 月にかけては雨期であり，降雨量は年によりかなりの増減がある由であるが，夕方のスコールは短時間のうちにコロニア内の排水溝から道路にみるみる赤水が溢れ出すものすごさであった．

広大な農地はすべて赤土で，よく手入れがいきとどいており，灌木が生茂っ

た周辺の未開拓の荒地といちじるしい好対照である．未舗装の道路の先方に白く輝く屋根の平屋建ての住居は，見なれたメキシコ人家屋とも異なっている．住居の傍らには揚水用の風車の鉄塔がそびえ，数年前訪れたペンシルバニア州のアーミシュ村落の風車のある風景に想いをはせたことであった．

(1) 社会組織

南ロシアのウクライナにおいても，またカナダにおいても，メノナイト集団がその宗教原理に立脚して強調したことの一つは，その共同体を自治的に管理し政府当局の干渉の手を拒むという態度であった．この態度は今日のメキシコにおいても継承されており，かれらは独自の社会組織を展開し，行政的にはミゲラウサの村当局 (Municipio) の許にあるとはいえ，一つの独立した自治区を形成している．

この地のコロニアには約4,500名，460家族が17の村 (Dorf, Campo) と呼ばれる単位集団に分たれて居住している．平均して30家族からなる村は，かれらの社会生活上の重要な単位集団である．村は村内に居住する土地所有農民の戸主 (Wirt) による村会議 (Schultenbott) において選出された，任期2年の村長 (Schult, Jefe) により統轄されている．かれの主要な職務は村内の共同牧場の管理と牧童の雇用，学校運営，税の徴集，道路（未舗装である）や排水溝の修復整備，生活困窮者の援助などであり，村会議の同意をえてこれらの職務を遂行する．村長の他に，かれを補佐し会議の記録をとる書記，火災保険担当者が村の役職として選出されている．

さらに，この17の村を統轄するコロニア全体の代表者 (Vorsteher, Jefe Maximo) が任命されている．かれはコロニア全体に関する問題，とくに土地所有簿の保管，必要とあれば土地取得の調停が委ねられている．とりわけ重要な任務はコロニア全体の土地の名儀上の所有者であることである．個々の農民はコロニアの土地を購入して農業活動に従事しているが，名儀上の所有権はコロニアに属し，最終的な土地のコントロール権はコロニア自体にあるという．また，かれはミゲラウサの村役場あるいはサカテカス州当局などとの対外交渉役でもある．したがって，この職務に就任する者はかなりのスペイン語能力が要求さ

れるようである．このことは現在の代表者マルテンス氏（C. Juan Martens, 44歳）が，流暢なスペイン語の語り手であることからも推察することができよう．

このようなコロニアの世俗的側面を管理する組織に加えて，宗教的側面での役職者が存在する．このコロニアは宗教的に四つに区分され，それぞれが一つの教会（Gemeinde, Congregacion）を形成している．各教会には教役者（Dienst, Sacerdote）が20歳以上の男性教会員の投票で選出されている．さらにこれらの教役者の互選によって，コロニア全体の宗教指導者が選出され，司教（Lehrdienst, Obispo）と呼ばれている．これらの教役者は日曜日の礼拝で司式，説教をし，洗礼志願者にカテキズム教育をし，洗礼式（アルトコロニー・メノナイトでは再洗礼派の伝統にしたがい成人洗礼のみを承認しており，18歳から20歳までの間に受洗する），結婚式，葬式を執行する．ついでかれらに課せられた責務は教会員の倫理的行為の強化であり，教会員の除名・追放の権能があたえられている．一種の教会法廷ともいいうる聴問会（Dunnadagh）と呼ばれる会で不行跡の者と会い，場合によっては除名・追放というこのメンバーが最もおそれるペナルティを課すという．このペナルティはアーミシュにみられる忌避（Meidung）と類似した社会的追放である．不行跡者は教役者により任命された情報提供者（Kroagah）から報告されるのが通例であるといわれる．教役者はかくして，コロニアにおける宗教＝社会的規範の強力な擁護者としての役割と機能を有しているのである．もちろん，かれらはすべて自営農民であり，その職務に対する報酬は支払われない．

村（Dorf）に対応する単位集団として，アーミシュでは教会区（Distrikt, Dale），ハッタライトではコロニー（Bruderhof）がある．ともに平均して30家族からなっている．ところで，私有財産制をとるアーミシュの場合，教会区の役職者は牧師，説教師，執事という宗教的教役者のみである．租税，土地関係はすべて個人の問題であり，そのための役職者は存在しないし，実際上必要でもない．これに対し，財産共有制を実践するハッタライトは，首席説教師，補助説教師，執事のごとき宗教的教役者と，コロニーの代表者，農場管理者など

による委員会の合議制でコロニーが運営されている.[21]

コロニア・メノニータスにみられる社会組織は，このように，宗教的教役者群と世俗的生活面を管理する役職者群の2系統とに分たれてはいるものの，かれらの中にあっては，ハッタライトの事例のごとくに両者が密接に結合されているとみるべきであろう．かれらのコロニアは神の直接的支配の許にある可視的な神の王国にほかならず，伝統的に保持してきた生活様式をふくむすべてのアルトコロニー・システムは，聖と俗とに分つことのできない聖なる世界に属するものだからである．

(2) 教育制度

アルトコロニー・メノナイトはアーミシュ，ハッタライトなどのエスニック・セクトと同じく，その伝統的ウェイ・オブ・ライフに子女を社会化することにいちじるしい関心を抱いている．アーミシュが公立小学校を拒否して自らの単級小学校を運営し，ハッタライトが公立小学校に加えて，自らの文化伝達を目的とするドイツ語学校を併設しているように，この集団もまた自らの独自の教育体系を確立している．かれらの移住に際して，この固有の教育体系維持を移住先の政府に必ず承認させている事実は，その歴史が明確に物語っているし，とりわけ，教育問題がアルトコロニー・メノナイト成立の主たる要因であり，また，カナダ脱出の中心問題であったことからも，かれらにとりその重要性を理解することができよう．

ダンチッヒ，モロチュナでは，メノナイトの中等教育機関が設置されていたようであるが，[22] アルトコロニーのコルティツァあるいはかつてのマニトバでは小学校制のみであり，メキシコにおいても初等教育に限り実施されている．小学校は各村に1校宛設置されているので，ミゲラウサのコロニアには17の小学校が存在する．各校とも教師1名の単級小学校である．教師のひとり，57歳になるデェルクセン氏（Jacob F. Doerksen）の語るかれの小学校は，およそ次のごとくである．

この小学校は，男子が6歳から13歳までの7年制，女子が6歳から12歳までの6年制で，54名の児童が在籍している．1年に6ヶ月，1週5日制で，午前

8時30分から11時30分まで，午後12時30分から3時30分までの授業時間である．教育する科目はいわゆる 3R's であり，ドイツ語の読み書き，算数，それに音楽を教える程度にすぎない．生徒には教科書がなく，教師用テキストとして下級生向きに，*A=B=C Buchstabier und Lesebuch,* 1948（出版地不詳）を，上級生向きに，*Kleines Wörterbuch Deutscher Rechtschreibung,* 1952, Hamburg を使用している．いずれも西ドイツから購入したという．全生徒に対して，ルター訳聖書を毎日読ませているという．音楽は教会の礼拝で用いる *Gesangbuch eine Sammlung Geistlichen Lieder zur Allgemeinen Erbauung und zum Lobe Gottes,* Scottdale, Pa.: Mennonitischen Verlagshaus を使用している．アルトコロニー・メノナイトの宗教用語はドイツ語である．かれらの宗教生活の継承は何よりもドイツ語の充分な能力を学校で教育することに依っているといっても過言ではない．したがって，この学校の最大の課題はドイツ語教育なのである．

筆者はアルトコロニー・メノナイト児童のパーソナリティ分析の資料にと，かつてアーミシュ小学校で試みた HTP テスト (House-Tree-Person Test) の絵を描かせるべくデェルクセン氏に申出たが，絵を描かせたことがないとの理由で断られた．宗教原理のみならず社会文化的環境もアーミシュといちじるしく類似していることから，この地の児童もアーミシュ児童とほぼ同型の内向型，服従型といったパーソナリティ・タイプ[23]が観察されるのではないか，との予測をもっている．

校舎は村の費用で建築されている．その営繕補修などの管理はすべて村長を中心とする村の役職者の責任である．この校舎は教会として宗教行事にも用いられている．もちろん，校地はコロニアに所有権がある．

この小学校教師は村内で適当と思われる男性に依嘱されるのみで，とくに養成の手段があるわけではない．ドイツ語に堪能であることが教師の第一条件で，農業に関心のないような人物が選ばれるともいう．デェルクセン氏はドイツ語のみで，スペイン語は全然出来ない．教師養成の方法がすでに確立し，未婚女性を採用しているアーミシュとは好対照をなしているようである．教師の俸給

は村から支給されるが，傍らに農業を営んでいるので俸給額は余り問題でないという．しかし，教科内容についての教役者の監視の目はきびしく，何か不都合なことが情報提供者の耳に入れば，かれはやがで聴問会に立たなくてはならない．アーミシュの場合，伝統的文化の伝達者としての教師の役割をきわめて重視しているのに比較して，ここの場合，それほどの重みが教師にあたえられていないのではないか，との印象を筆者はぬぐいえなかったのである．

(3) 経済活動

初期再洗礼派の大部分は都市居住者であったが，迫害はかれらを農村部のむしろ未開拓で孤立した山間僻地での農業をもって生計をたてる方向へむかわせた．今日でも，一部都市化された群を除くと，メノナイト系諸集団の大半，とりわけアーミシュ，ハッタライトなどのエスニック・メノナイトは農業中心主義をとっている．アルトコロニー・メノナイトとて例外でなく，ウクライナ，マニトバ，そしてメキシコと農耕に適した土地を求めて移動してきている．

コロニアの土地は名儀上コロニアの所有である．しかし，校地，道路，共同牧場のごとき共有地を除くと，実質的にはすべて個人所有となっている．とはいえ，土地に関する最終的な支配権の行使はコロニア自体にある．したがって，個人はコロニアの許可を得なければ売買することができない仕組みである．誰かがその所有する土地を許可なく他者に売却するとすれば，かれは即座にコロニアの役職者より処分されることになるのである．

成員のほとんどはかかる土地を所有する自営農民であり，平均10名という家族全員が農耕に牧畜に勤しんでいる．主要作物はトウモロコシ，麦類，インゲン豆などである．種まき，施肥，耕作にはいたって旧式のトラクターが使用されている．アーミシュ農業と同じく，近代的農業機械が禁止されており，この点，大型農業機械を駆使するハッタライト農業とは大きく異なっている．住居の周囲には菜園や果樹園があり，主として女性の活動領域となっている．

牧畜も盛んであり，このコロニアでは約5,000頭の牛が飼育されている．牧場の面積が牛の頭数に比較して狭すぎるのが頭痛の種という．この頭数であれば40,000ヘクタールが必要であるのに，実際には5,800ヘクタールしかないか

らである．サイロは全く見かけなかった．1日の牛乳生産量は約40,000リットルで，自家消費分を除く35,000リットルほどがチーズ加工用にまわされている．コロニアには私企業と共同経営の2つのチーズ工場がある．土地をもたない者（Anwohner）や青年たちがこれらの工場で働いている．メノナイトのチーズ（queso menonitas）はメキシコ社会でかなり高い評価を獲得しているようである．

豚もかなり飼育されており，全体で2,500頭近くになるという．家禽類も各家族で自家消費用に飼育されている．馬は1,400頭ほど飼育されているが，農耕，運搬用のみでなく，自動車の使用を禁じているかれらにとり，ゴムタイヤの馬車は重要な交通手段として用いられている．

農業がかれらの基本的経済活動であるとはいえ，すでにコロニアの農場は幾分か手狭まになってきており，土地を所有しえない若者が生じている．だからといって，メキシコ人社会での労働は許されない．かれらはコロニア内の他の農場や共同牧場，あるいはチーズ工場や機械修理工場などの労働者として雇用されている．コロニアにおいては，本来階層分化のないことを理念として有しているが，現実にはこれら土地を所有していない者が存し，土地所有農民に比して一段低い階層にみられている．後者は村会議の構成員たる資格をあたえられているにもかかわらず，前者には何らの特権もないからである．

(4) その他の文化特性

アルトコロニー・メノナイトが再洗礼派に特徴的な基本的宗教原理を，かたくななまでに保持していることはすでにのべた．この信念にもとづいて，かれらは外部社会から可能な限り孤立した共同体を構築し，外部社会との接触，干渉を最少限に抑制する社会構造あるいは教育制度を展開していることも指摘したところである．

この原理に起因し，かつそのシンボル的表象としてかれらの間に実践されている，特異な生活慣習の2・3をここに紹介しておきたい．

かれらは交通の手段としての自動車を禁じ，馬ないし馬車を利用する．この点はアーミシュと同様であるが，アーミシュが鉄輪の馬車でなければならない

のに対し，ここではゴムタイヤが使用されている．また，かれらも電力使用を忌避する．動力源は旧式のガソリン・エンジンであり，照明には石油ランプを用いる．電力を禁じているので揚水は住居の傍らに組立てた鉄塔の風車によっている．かれらの理解によれば，アーミシュと同じく，かかる現代の利器はまさに「この世的なもの」の典型であり，厳格に忌避されなければならない対象なのである．

外部社会との交渉がきびしく制約されているために，かれらはその固有の生活実践を保持している．その最も特徴的なすがたはかれらの言語であろう．北ドイツ，オランダから東プロシヤ，ポーランド，ウクライナ，マニトバを経てメキシコに移住するまで，約400年を経過しているにもかかわらず，かれらの日常用語は依然として低地ドイツ語である．もっとも，かれらの言語は低地ドイツ語を基盤に，かれらが移住した先々の言語，たとえば古いプロシヤ語，ポーランド語，ロシア語とくにウクライナ語，東欧イーデッシュ，そして最後に英語まで混り合った混合言語であるともいわれている[24]．アーミシュの中高ドイツ語（Mittelhochdeutsch）をベースにしつつも英語のかなり混入した，いわゆるペンシルバニア・ジャーマン（Pennsylvania German）を語る事実といたって類似した現象である．

かれらが着用する衣服も一般メキシコ人とは明らかに異なっている．男性は農作業に際してシャツにサロペットを，女性はワンピースにエプロンを着用し，つばの広い麦わら帽をかぶる．礼拝時に男性は背広を着用するとのことであるが，実際に確認していない．食事もトースト，ママレードなど多分に「ドイツ的」という印象のものを摂っている．メキシコ人の常食であるトルテーヤ（tortilla）もいくらか食しているが，かれらのように唐辛子（chile）を常用することはない．

婚姻に関する詳細な規定ないし慣習については充分情報をうることができなかったが，もちろん，宗教的内婚制をとっている．このコロニア内部のみでなく他のコロニア，とりわけデュランゴの母胎コロニーとの通婚が頻繁にみられるようである．このことは同時にエスニックな内婚であることをも意味してい

る．このように，外部社会との通婚を禁じていることは，成員のリクルートメントに関しても外部社会からの加入を禁止していることと関連性をもっている．正規の成員たる資格は洗礼と同時にあたえられるが，それは成員子女のみに限定されており，一般メキシコ人の加入はいまだに1例もないという．他方，この集団からの離脱者，言語，生活慣習，そして宗教信仰のすべてがまったく異なるメキシコ社会への離脱者もいたって少ないようである．チワワでかれらを対象に伝道活動を行っているアメリカ系のメノナイトの成果が，20数年を経た今日でも僅か300名程度という事実[25]からも，この離脱者の少なさをうかがい知ることができよう．

むすびにかえて

われわれは，エスニック・セクトの一事例として，メキシコにおけるアルトコロニー・メノナイトを取上げ，その歴史的推移と現在のすがたを観察してきた．以上のべてきたことを，ここで「結び」にかえて要約しておきたい．

この集団はたしかに19世紀末にカナダ・マニトバにおいて創設されてはいる．しかし，16世紀再洗礼派にその起源をもつメノナイトの伝統，すなわち「この世からの分離」および「つり合わないくびきを共にしない」という基本的宗教原理を頑なに固執していることから，その創設にいたるまでの歴史的プロセスを看過することはできない．オランダ，北ドイツにおいて発生した初期メノナイト集団は周辺諸国の再洗礼派の流入を受入れ，異質的なエスニック要素を多分にふくんでいる，宗教信仰と実践という純粋に宗教的価値志向性を中核にもつセクト集団であった．迫害がかれらをダンチッヒ周辺にむかわせて以降，次第にこの集団はドイツ化の傾向を強めていき，さらに，ウクライナに定着するにいたって，一般ロシア社会のそれとは異なる自己完結的社会構造とドイツ的色彩の濃厚な独自の文化的パターンを有する共同体の形成に成功したのであった．すなわち，メノナイトという宗教的セクト集団は，同時に，一つのエスニックな社会文化的集団と同一視されうるエスニック・セクトの形態をとるようになった，ということである．

ところが，かれらが次にカナダに移住した際，この形態は政府のインパクトを受けて若干の混乱を招致し，この時に伝統的立場に恭順な態度をとった保守的な群が分岐して，アルトコロニー・メノナイトの創設となるのである．さらにこの群は，その宗教原理と伝統的生活様式の維持を許容するメキシコに移住し，今日みられるような特徴あるエスニック・セクトとして存続しているのである．

現在，メキシコにおけるアルトコロニー・メノナイトは，次のごとき諸点において，エスニック・セクトとしての特徴的形態を示している．かれらはその強固に信奉する宗教原理のゆえに，(1) 政府当局の干渉と外部社会との接触を可能な限り排除しつつ，ウクライナ時代に確立された独自の自己完結的社会組織を保持する孤立したコロニアを設立している．(2) 言語，経済活動，教育制度，相互扶助，衣服，食習慣のごとき文化的側面において，この集団の発生地オランダ，北ドイツ的要素を中核にして，かれらが移住先で形成してきたエスニックな色彩のいちじるしい独自の文化的パターンを展開しており，メキシコの社会文化的パターンへの同化の傾向は極度に少ない．さらに，(3) この集団はその成員性を広く外部社会に開放することなく，成員の子女にのみそれを排他的に限定している．かかる閉鎖的セクトにおいて，集団内部における成員補充がその存続にとり最も有効な方法であることは，すでに指摘したところであるが[26]，年平均4ないし5％という高い人口増加率をもつこのコロニアそれ自体が唯一の成員補充の源泉になっており，そのエスニックな意味での存続にとっても最も効果的な手段となっている．通婚もまたセクト内に局限されており，メキシコ社会からの人的移入は皆無である．

本稿は僅かな期間での調査資料にもとづくものであり，将来の本格的調査によって補足されあるいは改めらるべき点が多々存していることは否定できない．加えて，アーミシュ，ハッタライトのごときセクト集団との綿密な比較分析を通して，エスニック・セクトのさらに明確な概念と具体的実態とが追求さるべき必要性のあることも事実である．いずれ他日を期したいと考えている．

註

(1) 以下，本稿におけるアーミシュの記述については，拙著『アーミシュの研究』(1977年) 参照のこと.

(2) Herbert Minnich, "Mennonites in Latin America," *Mennonite Quarterly Review* (以下 *MQR.* と記す」, 1974, 48, 3, 385-388.

(3) Paul N. Kraybill (ed.), *Mennonite World Handbook,* 1978, Mennonite World Conference, 227ff.

(4) 拙稿「コミュナル・セクト」,『哲学年報』1979, 第38輯10頁以下に，ハッタライトの概観がのべられている.

(5) *Mennonite Encyclopaedia* (以下 *ME.* と記す), 1969, Mennonite Publishing House, I, 31.

(6) *ME.*, II, 10.

(7) E.K. Francis, "The Russian Mennonites", *American Journal of Sociology,* 1948, 54, 2, 103.

(8) David G. Rempel, "The Mennonite Commonwealth in Russia", *MQR.*, 1973, 47, 4, 281ff.

(9) *ME.*, I. 569.

(10) *ME.*, I, 570.

(11) Georg Leibbrandt, "The Emigration of the German Mennonites from Russia to the United States and Canada 1873-1880," *MQR.*, 1933, 7, 1, 6ff.

(12) ロシアに残留したメノナイト集団については余りよく知られていない. かれらの最近の動向は, N.I. Il'inykh, "Peculiarities of the Organization and Activity of Mennonite Congregations", (*Soviet Sociology,* 1972, 11, 2, 145-159) によって知るのみである. それによると，エスニックな特性は依然強く，むしろ青年層の信者が増加する傾向がみられ，政府の無神論教育は余り効果をあげていないという.

(13) *ME.*, IV. 38.

(14) Calvin Redekop, *Old Colony Mennonites,* 1969, The Johns Hopkins Press, 6ff.

(15) マニトバにおける教育問題をめぐっての評価は, E.K. Francis, "The Mennonite School Problem in Manitoba, 1874-1919", (*MQR.*, 1955, 27, 3, 204-207) を参照のこと.

(16) たとえば，小学校で国旗を掲揚する教師の雇用が要求されたり (*ME.*, IV, 40), 戦時債券の購入や赤十字への支援活動が強制されたりしている (C. Redekop, *op. cit.*, 13f.).

(17) Harry L. Sawatzky, *They Sought a Country,* 1971, University of California Press, 39f. に，この特許状 (Privilegium) の英訳が記載されている.

(18) *ME.*, IV, 40f.

(19) アルトコロニー・メノナイトの人口増加率は最近の20年間平均4ないし5%の高率に達しているという(C. Redekop, "The Old Colony: An Analysis of Group Survival," *MQR.*, 1966, 40, 3, 191).

(20) H.L. Sawatzky, *op. cit.*, 182.

(21) John A. Hostetler & G.E. Huntington, *The Hutterites in North America*, 1967, Holt, Rinehart and Winston, 29.

(22) D.G. Rempel, *op. cit.*, MQR., 1974, 48, 1, 40f.

(23) 拙著『アーミシュ研究』, 357頁以下.

(24) H,L. Sawatzky, *op. cit.*, 16.

(25) P.N. Kraybill, *op. cit.*, 230.

(26) 拙稿「コミュナル・セクト」, 19頁以下.

付記

サカテカス州ミゲラウサのアルトコロニー・メノナイトの居住地, コロニア・メノニータスの調査に際して, 東京外国語大学助教授清水透氏および福岡教育大学講師猪又徹氏の多大の御協力をえた. 記して感謝の意を表したい.